湖西市立小中学校再編方針

令和５年５月

湖西市

目次

１　はじめに　・・・・・２

２　小中学校の状況　・・・・・３
（１）児童生徒数の推移　・・・・・３
（２）小学校の現状と推移　・・・・・３
（３）中学校の現状と推移　・・・・・４
（４）通学における現状　・・・・・５

３　本市の教育について　・・・・・７
（１）本市のめざす人づくりについて　・・・・・７
（２）子どもたちの発達段階にあわせた子育てについて　・・・・・７
（３）本市のめざす教育環境について　・・・・・８

４　本市の望ましい教育環境について　・・・・・10
（１）小規模校のメリット・デメリット　・・・・・10
（２）１学年で必要な児童生徒数　・・・・・11
（３）望ましい学級数　・・・・・11

５　本市の望ましい適正配置について　・・・・・13

６　これからの白須賀小学校、白須賀中学校について　・・・・・14
（１）現在の白須賀小学校、白須賀中学校の教育活動について・・・・・14
（２）児童生徒数の推移について　・・・・・14
（３）子育て世代のアンケート結果について　・・・・・16
（４）今後の方向性について　・・・・・16
（５）白須賀地区の適正配置の難しさについて　・・・・・17
（６）今後のスケジュールについて　・・・・・19

７　これからの東小学校、知波田小学校、湖西中学校について・・・・・20
（１）現在の東小学校、知波田小学校、湖西中学校の教育活動について・20
（２）児童生徒数の推移について　・・・・・20
（３）子育て世代のアンケート結果について　・・・・・21
（４）今後の方向性について　・・・・・22
（５）今後のスケジュールについて　・・・・・25

８　おわりに　・・・・・26

１　はじめに

本市は、小学校６校、中学校５校の計 11 校あり、風光明媚な浜名湖、遠州灘、湖西連峰に囲まれ、豊かな自然の中で、子どもたちは体験を重ねて、楽しい学校生活を送っています。本市の教育は、「未来の湖西を創る“ひと”づくり」を基本理念とし、「やさしく、たくましく、こころざしのある“ひと”」の育成を掲げています。幼少期から成人期、老年期になっても、知りたい、学びたい、活動したい、運動したいと学び続け、成長することができる環境作りに取り組んでいます。幼児・学校教育では、未来を担う子どもたちが、将来にわたって主体的にたくましく生きるために、確かな学力・豊かな心・健やかな体の「生きる力」をバランスよく育むことを目指しています。

さて、全国的に少子化が進んでいます。本市でも、40 年ほどで児童生徒数が半減しています。現在の小中学校は、保護者や地域の方々の協力を得ながら、学校運営を工夫することで、子どもたちの健やかな成長を促すことができる環境が維持されていますが、少子化の波により、子どもたちのコミュニケーション能力の育成、多様な考え方から学びを深める機会の保障など、これまでの教育環境を維持していくことができるのかが懸念されています。

このような状況の中で、令和３年２月の湖西市総合教育会議において、急激な少子化の進行を考慮し、小中学校の適正な規模や配置のあり方の検討が必要であると議論されました。教育委員会では、少子化に対応した教育環境の確保に向けて、令和３年６月に学校教育施設適正化検討委員会（以下「検討委員会」）を設置しました。検討委員会では、子どもたちにとってよりよい教育環境を充実させることを基本的な考え方として、小中学校の現状や児童生徒数の推移、保護者等のアンケート結果、様々な見地から議論が重ねられ、その結果を令和４年３月に報告書にまとめました。

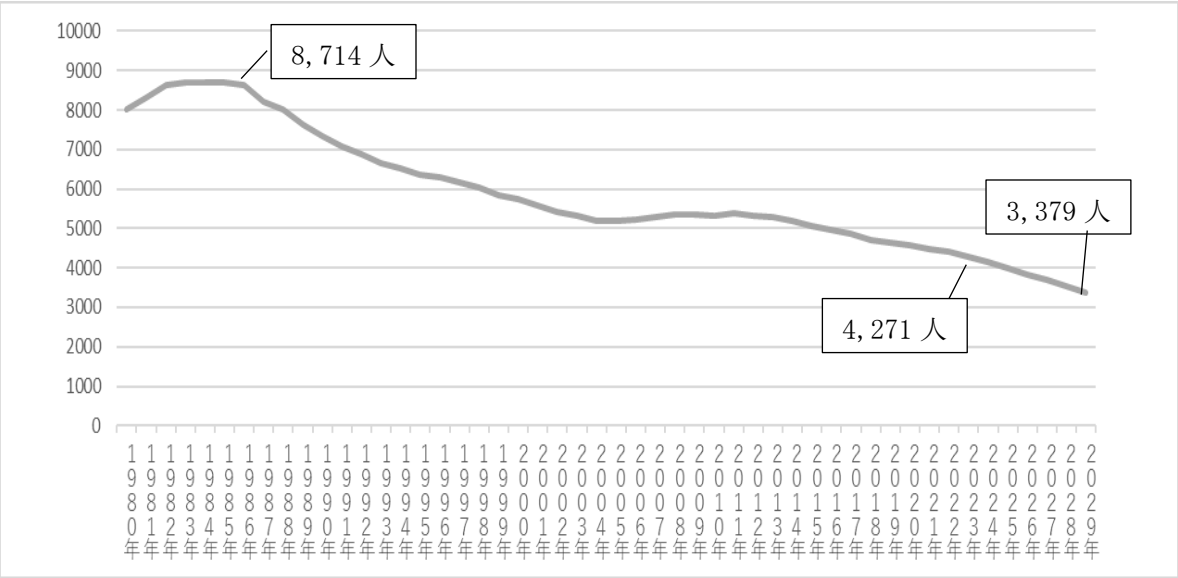
教育委員会では、この報告書を基に、令和４年５月から、地域や保護者の方々を対象にして「これからの小中学校について意見交換会」を実施し、意見交換を行ってまいりました。そこでいただいた御意見や子育て世代を対象にしたアンケート結果などを踏まえ、今後のよりよい教育環境の実現に向けた小中学校の学校再編方針についてまとめました。

２　小中学校の状況

（１）児童生徒数の推移

本市の小中学校の児童生徒数は、全国的な少子化の傾向と同様に、年々減少傾向にあります。1980 年から 2029 年までの児童生徒数の推移を見ると、1985 年の児童生徒数は 8,714 人で、約 40 年後の 2023 年には、4,271 人になり、半減しています。2029 年には推計で 3,379 人になり、2023 年よりも、さらに 892 人の減少が見込まれています。

児童生徒数の推移



（２）小学校の現状と推移

令和４年度から令和 11 年度の推計では、児童数は減少していくことが見込まれます。「公立小・中学校の国庫負担事業認定申請の手引き」による学校規模に照らし合わせると、本市の学校規模は、大規模校（19～30 学級）が３校、小規模校（６～11 学級）が３校となっています。

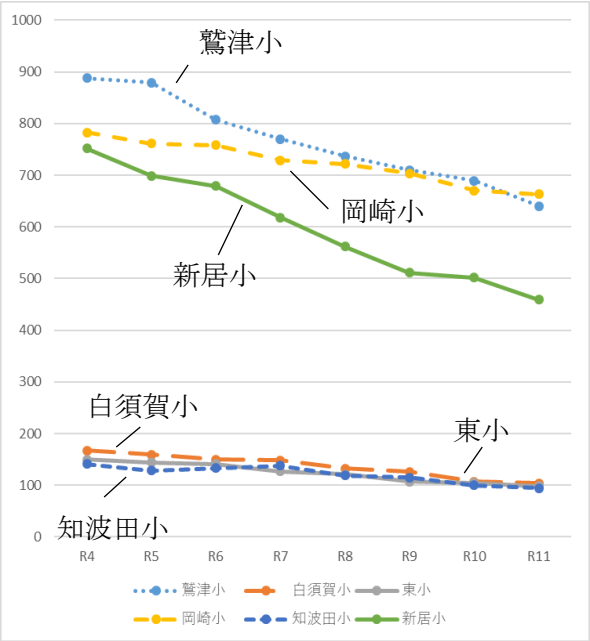
大規模校では、少子化が進むことにより、鷲津小学校、岡崎小学校で１学年４学級に、新居小学校で１学年３学級になっていくことが予想されます。将来的には、大規模校から標準規模校（12～18 学級）に近づいていきます。

小規模校では、１学年 20 人を下回ることが予想されています。

小学校児童数の推移（見込）

学校名	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11
鷲津小	888	879	807	770	737	710	689	640
白須賀小	167	159	150	148	132	126	107	104
東小	150	144	141	127	121	107	105	98
岡崎小	783	761	758	729	722	704	670	663
知波田小	141	128	133	138	119	115	100	94
新居小	752	699	679	618	562	511	502	459
合計	2881	2770	2668	2530	2393	2273	2173	2058

小学校児童数の推移（見込）



（３）中学校の現状と推移

令和４年度から令和 17 年度の推計では、小学校と同様に生徒数は減少していくことが見込まれます。本市の学校規模は、標準規模校（12～18 学級）が３校、小規模校（３～11 学級）が２校となっています。

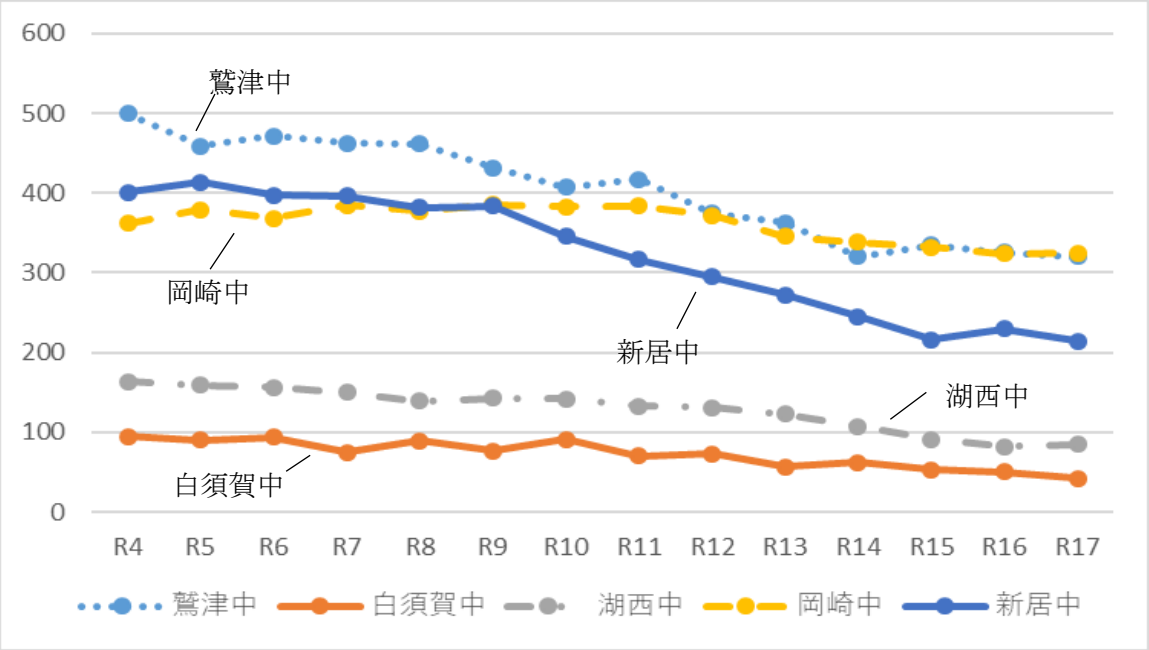
標準規模校では、鷲津中学校、岡崎中学校で１学年４学級は維持されると予想されます。新居中学校では、１学年３学級となっていき、小規模校になっていくと予想されます。

小規模校の湖西中学校では、令和 14 年度からは、１学年１学級となる学年が生じる可能性があります。白須賀中学校では、生徒数の減少が続き、１学年 25 人を下回るようになっていきます。

中学校生徒数の推移（見込）

	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15	R16	R17
鷲津中	500	459	472	463	462	432	407	417	375	363	320	335	326	320
白須賀中	95	90	94	75	89	77	91	70	73	57	62	53	50	42
湖西中	164	159	156	150	139	143	142	133	131	123	107	91	82	85
岡崎中	362	379	368	385	377	386	383	384	372	346	338	332	324	325
新居中	401	414	397	396	382	384	346	317	295	272	245	216	230	214
合計	1522	1501	1487	1469	1449	1422	1369	1321	1246	1161	1072	1027	1012	986

中学校生徒数の推移（見込）



（４）通学における現状

文部科学省が示している通学距離である小学校４km 以内、中学校６km 以内の範囲内から通学している児童生徒がほとんどです。小学校の遠距離通学者の中でバスを利用している児童もいます。中学校の遠距離通学者は、自転車を利用しています。通学路の安全性については、今後も安全点検を実施し、道路管理者、警察など関係機関と連絡調整し、改善を図っていきます。

＜小学校　遠距離通学者の通学距離＞

学校名	地区名	通学距離	通学方法
鷲津小学校	坊瀬	3.9km	徒歩
白須賀小学校	新町	2.9km	徒歩
	笠子	3.6km	コーちゃんバス（往復）
	笠子北	4.3km	コーちゃんバス（往復）
東小学校	入出	2.3km	徒歩
	新所	2.2km	徒歩
	吉美	2.5km	徒歩
岡崎小学校	梅田	2.3km	徒歩
	神座	2.1km	徒歩
知波田小学校	太田	2.6km	徒歩
	横山	3.2km	コーちゃんバス（往路のみ）
	中尾平	4.3km	徒歩（一部保護者送迎）
新居小学校	あけぼの	2.7km	コーちゃんバス（往復）
	新居弁天	3.1km	コーちゃんバス（往路のみ）
	新弁天	3.6km	コーちゃんバス（往路のみ）
	大倉戸	2.7km	コーちゃんバス（往路のみ）

＜中学校　自転車通学者数＞

学校名	鷲津中	白須賀中	湖西中	岡崎中	新居中
在籍人数	459	90	159	379	414
自転車 通学者人数	22 (4.8%)	39 (43.3%)	111 (69.8%)	0 (0%)	164 (39.6%)

（令和５年５月現在）

３　本市の教育について

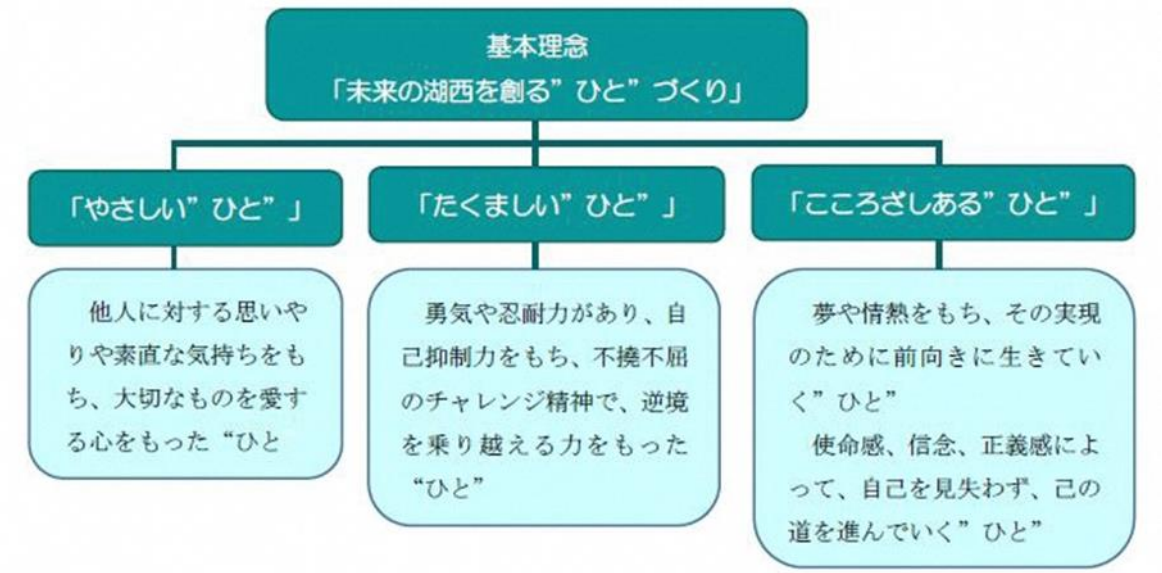
（１） 本市のめざす人づくりについて

令和３年度から第２次湖西市教育振興基本計画（以下「教育振興基本計画」）がスタートしています。

本市では、「障子を開けてみよ。外は広いぞ。」郷土の偉人豊田佐吉翁の言葉のとおり、夢やこころざしをもち、未来にはばたく「ひと」を育み、誰もが生涯にわたり学び、成長できる機会を絶やさぬよう、「今日」よりも「明日」、「明日」から「未来」へと、先を見据えて着実につなげていく想いを込め、「未来の湖西を創る“ひと”づくり」を基本理念としています。「未来の湖西を創る“ひと”」とは「やさしく、たくましく、こころざしある“ひと”」のことです。

学校教育では、この実現のために「自ら学ぶ力、生きる力を育む学校教育を推進します」を基本目標として掲げ、これまでの基本計画を引き継ぐとともに、新たな時代に対応した教育を進めています。具体的な施策として、「安全・安心で学びを支える学校施設を整備します」、「質の高い学習環境を整備します」、「夢と信頼と充実感のある学校づくり、子どもが主体的に学ぶ授業づくりに取り組みます」、「一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援に努めます」など９つの施策を実施しています。

今後も、このような人づくりを進めることができる環境を整えていくことが大切であると考えます。

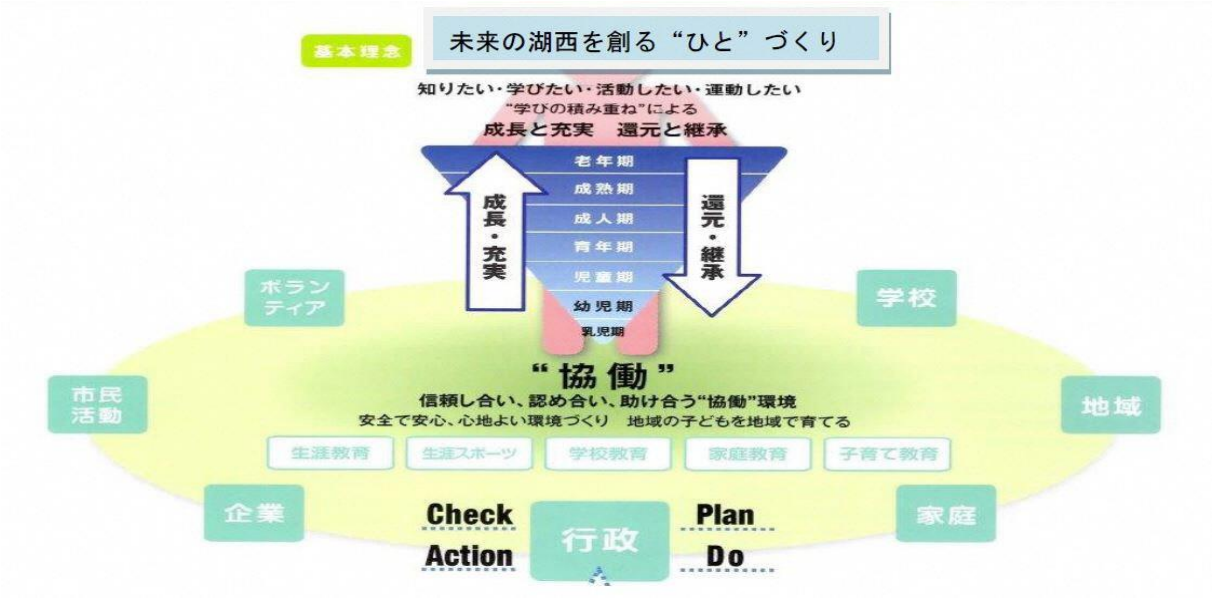


（２） 子どもたちの発達段階にあわせた子育てについて

子どもたちは、幼児期、児童期、青年期を経て、大人になっていきます。０～９歳は、自分を好きだと思う感性を養うことを大切にする時期です。10～15 歳は、身体的な自立を促し、多くのことにチャレンジして、興味の幅を広げ、将来の仕事選びをしていく時期です。16 歳以上は、経済的な自立、自己決定のトレーニングをする時期です。子育ては家庭と園・学校が連携をとりながら、愛情をもって接することが大切です。発達段階を押さえた適切な関わり方をすることで、心身の健やかな成長を促し、自立するために必要な資質・能力を育成することができます。

ライフスタイルに応じた本市の教育は、成長する自己の学びの積み重ねを支える基

盤として、信頼し合い、認め合い、助け合う「協働」環境を大切にしています。園・学校・地域・家庭の横の連携と幼児期から高齢期までの縦の連携を図りながら、本市の教育全体が、学びの積み重ねによる成長と充実・還元と継承につながるように取り組んでいます。



（３） 本市のめざす教育環境について

本市のめざす人づくりや子どもたちの発達段階を勘案すると、本市のめざす教育環境として４つの柱があると考えます。

① 安全・安心な環境を整える。

子どもたちの意欲が勉強や運動に向かっていくためには、安心できる環境が必要です。安全に登下校できる環境や災害に対して強固な建物であること、雨漏りや故障がなく、安心して学ぶことができる環境など、子どもたちが安全・安心な環境の中で、学校生活を送ることが何よりも大切です。

② 思いやりのある言動を育成できる環境を整える。

自立して社会の中でよりよく生きていくために、身につけさせたい力は、コミュニケーション能力です。お互いに相手を思いやり、信頼関係の中で生活することができるように、学校でも、家庭でも、子どもが人間関係で悩んだときには、励ましていくことが必要です。信頼関係があることで安心して、思いを伝えて、考えを深めたり、困っているときには、助けようとしたりすることができます。そのような人と人との関わりの中でコミュニケーション能力が育っていきます。

③ 目標を自分ごととして受け止め、仲間と共に切磋琢磨して取り組む環境を整える。

子どもたちが、「興味があるから」、「将来、〇〇になりたいから」など意欲的に学び続けることで、社会に出てからも、積極的に物事に関わろうとする力を育てていくことができます。他者と関わりながら学ぶことで、自分とは異なる考えや優れた技能があることを知り、自分の考えを見直したり、手本としてまねをしたりして、

自分自身を向上させることができます。他者と共に、学び合い、高め合うことで、共に成長できる集団となります。思いやりのある言動によって、信頼関係が生まれ、そのような中で、お互いが磨き合うことで、資質・能力を向上させることができる環境づくりが大切です。

④ 豊かな体験ができ、多様な「ひと・もの・こと」に触れる環境を整える。

幼児期の親子関係が中心の世界から、友達、教職員、地域の人、習い事の仲間や指導者など、人と関わる世界が広がっていきます。自立に向けて、自分に合った生き方や在り方を決定していくためには、小さい頃から、多様な「ひと・もの・こと」に触れながら、豊かな体験を積み重ねることができる環境づくりが大切です。体験を通して、興味・関心の幅を広げ、感性や特技を磨いたり、知識を深めたりして、自己理解を図り、自分に合った進路を選択できる素地を養っていけるとよいと考えます。

以上のように急速に変化する時代においても、教育環境の整備を進めていく上で、４つの柱に力点を置いていくことが大切であると考えます。

４　本市の望ましい教育環境について

本市の小・中学校の児童生徒数の推計から、小学校大規模校３校は、将来的には、標準規模校になっていき、中学校標準規模校は、４学級か３学級になっていくことが予想されています。これらの学校では、これまでのように、児童生徒の人間関係に配慮した学級編制をしたり、学級対抗の場を設定し、活気のある学校行事を運営したりするなどメリットを生かした学校運営を継続していくことが望ましいと考えます。

小規模校の小・中学校では、少子化が進むことで、これまでのような少人数のメリットを生かし、デメリットを軽減する学校運営を行い、子どもたちを健やかに成長させることができる環境を維持できるかが課題になっています。そこで、小規模校のメリット・デメリットを改めて整理し、子どもたちが健やかに成長するために必要な最低人数について、考えをまとめました。

（１）小規模校のメリット・デメリット

小規模校のメリット・デメリットを学習面、生活面、学校運営面においてまとめると以下のようになります。

	メリット	デメリット
学習面	・教員が、授業の中で一人一人の学習状況を把握しやすいため、その子にあったアドバイスすることができ、学習内容の理解につなげられる。 ・発表する機会が多く、自分の考えを認められる場が増え、ありのままの自分を肯定する感覚が育まれる。 ・体験活動や校外学習などを設定しやすく、体験を通して興味・関心や見識を広げることができる。 ・学校行事等で児童生徒が活躍する場を多く設定することができる。 ・地域の人から、地域のよさや伝統について学ぶ機会を設けやすい。	・多様な考えに触れる機会が減り、他者の考えを参考にして、自分の考えを見直し、まとめ直す経験が少なくなる。 ・周りの人の意見や発表する姿などから、影響を受けて挑戦しようとする機会が少なくなりやすい。 ・運動会などの学校行事や合唱などの音楽活動等で活動に制限が生じやすい。
生活面	・児童生徒一人一人の性格を把握しやすく、その子にあった指導や支援をしやすい。 ・全校児童生徒の様子を複数の教員で見守ることができ、児童生徒に変化があった場合には、迅速に対応することができる。 ・異学年の活動を行いやすく、交流を深めることができる。	・個々の人間関係に問題が生じ、解決することが難しくなった場合、クラス替えで解決することが難しい。 ・学級内のルールや人間関係が固定化されることで、自分の新たな一面を発揮しにくい。
学校運営面	・児童生徒の実態や課題について、教職員が共通理解を図りながら教育活動を行うことができる。 ・体育館や特別教室などの利用時間の調整を行いやすい。	・学年別や教科別の教職員同士で、学習指導や生徒指導等についての相談や研修を実施しにくい。 ・教職員一人に複数の校務分掌が集中しやすい。

（２）１学年で必要な児童生徒数

現在の小規模校では、メリットを生かし、デメリットを軽減する学校運営が行われており、保護者、地域の方々の協力を得ながら、子どもたちを健やかに成長させることができています。その環境を維持するための１学年の最低人数について、検討委員会において、保護者、教職員、学校運営協議会委員にアンケートを実施し、最低人数について整理しました。

小学校では、１学年 20 人以上は必要である。

〇理由

・教員が一人一人にあったアドバイスをして学習内容の理解につなげることと、同級生との関わりの中で社会性を身につけることの両面から勘案すると 20 人以上は必要である。学習面では、人数が少ないことで、教員が個別に指導できる時間が増えるため、児童数が少ない方がよい面がある。しかし、社会性を身につける点では、多様な考えに触れる機会が少なくなり、自分の考えと比べたり、よい行いやアイデアを取り入れたりといった経験が乏しくなってしまう。他者から学び、成長するという点で、20 人は必要である。

・幼児期から児童期と、子どもたちは小集団から徐々に社会性を身につけて、大きな集団を形成していく。集団で活動することによって、自分と他者の相違点に気付きながら、個性を伸ばし、自立していくための知識や技能を身につけていくことを考えると必要な数である。

中学校では、１学年 30 人以上は必要である。

〇理由

・自分の夢や目標に向かって、切磋琢磨しながら学校生活を送り、心身を大きく成長させることができる時期であるので、30 人は必要である。

・思春期で、様々なことを思い、悩む時期である。他者との関わりが広がる時期であるので、できるだけ多くの人がいて、多様性を学ぶことができる環境が望ましい。また、人間関係に問題が生じた場合でも、30 人はいた方が、新たな人間関係を築きやすい。

（３）望ましい学級数

今後も少子化が継続していくと予想されています。近い将来には、１学年 20 人を下回ることも生じてきます。これからの子どもたちの教育環境を考えたときに、１学年の人数が減りすぎているために、少人数のメリットよりもデメリットの方が大きくなり、学校運営を工夫しても、子どもたちを健やかに成長させる環境が十分ではない状況となっていくと考えます。したがって、小規模校は何らかの手法を用いて、教育環境を整えていく必要があります。その際に、１学年でどれくらい学級数が必要であるのかを整理しました。

小中学校で、１学年２学級以上、できれば３学級が必要である。

〇理由

・単学級では、良好な関係が続けばよいが、人間関係に大きな問題が生じた場合には、子どもにも、保護者にも居場所がなくなってしまう可能性が高いため、２学級以上が必要である。

・２学級以上あることで、学級ごとに競い合う学校行事を通して、協力することの大切さを学んだり、活気のある活動によって達成感を味わい、心身の成長を促したりすることができる。

・社会へ出て行く上で、コミュニケーション能力は非常に大切である。毎年、クラス替えがあることで、人と積極的に関わり、仲間づくりをする機会があるため、コミュニケーション能力を育成することができる。
・できれば３学級以上あることで、子どもの人間関係に配慮しながら、学級編制することが可能となる。

５　本市の望ましい適正配置について

本市の状況から、少子化の進行により、小学校の大規模校は、標準規模校に近づき、中学校の標準規模校は、生徒数が減少するものの１学年４学級または３学級になると予想されています。

小規模校では、児童生徒数の減少が続いていくと、１学年 15 人を下回る可能性もあります。どのようなメリット・デメリットが生じるのかという点について整理しました。

【１学年 15 人前後や 10 人前後の規模になった場合のメリット】

・教員が、授業の中で一人一人の学習状況を把握しやすいため、その子にあったアドバイスをし、学習内容の理解につながる。

・係活動、委員会活動、運動会などで、一人一人が役割を自覚して、行動し、達成感を味わうことで、責任を持って取り組むことの大切さやありのままの自分を肯定する感覚が育まれる。

・人数が少ないことで、お互いの性格や長所、短所を理解しやすく、お互いを認め合い、思いやりながら、穏やかな雰囲気の中で学校生活を送ることができる。

【１学年 15 人前後や 10 人前後の規模になった場合のデメリット】

・人間関係が固定化し、級友に対する見方・考え方が固定してしまったり、集団での関わり方が決まってしまったりする可能性が高くなる。

・切磋琢磨して自分を成長させていこうとする意欲が醸成されにくい。

・体育のゲームやボール運動で、集団対集団での競い合いや攻防の中で、動きや作戦を工夫する上で制約が生じる。

・授業では、多様な考えに触れる機会が減り、他者の考えを参考にして、自分の考えを見直し、まとめ直す経験が少なくなる。

・同級生のよい考えや見本となる発表などに触れて、刺激を受け、自分もやってみたい、できるようになりたいと思う機会が減る。

・中学生は、心身の発達上の変化が著しく、また、生徒の能力・適性、興味・関心等の多様化が一層進展する時期であり、自我意識が高まるとともに個性が多様化してくる時期でもある。抽象的、論理的思考が発達するとともに社会性なども発達してくる。その時期に少人数で学校生活を送ることで、多様な考え方から、自己を成長させていく機会が不十分になる可能性がある。

これらのメリット・デメリットを勘案すると、将来的に１学級 15 人以下となった場合、デメリットの方が大きくなるのではないかと考えます。

したがって、小規模校の小学校、中学校では、何らかの手法を用いて適正配置の検討が必要です。そこで、小規模校である白須賀小学校、白須賀中学校、東小学校、知波田小学校、湖西中学校において、どのような配置が望ましいのかについて基本的な方針をまとめました。

６　これからの白須賀小学校、白須賀中学校について

（１）現在の白須賀小学校、白須賀中学校の教育活動について

白須賀小学校は、「いきいきと学び合う子」、「のびのびと行動する子」、「ちからいっぱい運動する子」を重点目標にしています。問いをもって意欲的に学び合い、確かな学力が定着する授業づくりや、互いに尊重しながら関わり合い、自分から行動する力を育てる場づくりを大切にすることで、「いきいき　のびのび　ちからいっぱい輝く子」を育成しています。

白須賀中学校においても、「考え、解決する生徒」、「思いやり、支え合う生徒」、「鍛え、挑む生徒」を重点目標としています。「見方・考え方」を働かせる授業改善をしたり、自主的・実践的態度を育てる学級活動を重視したりすることで、「豊かな未来を創る生徒」を育成しています。両校とも、少人数で人間関係が固定化してしまうデメリットを改善するため、自分の考えを交流させることで、学びを深めて自信につなげたり、地域の方を講師に招くことでひと・自然・歴史・文化・産業などとの出会いを増やしたりしています。

また、特色ある学校づくりに取組み、子どもたちに豊かな体験をさせ、活気のある教育活動を展開しています。

以上のように、現在の白須賀小学校、白須賀中学校においては、小規模であることのデメリットを軽減させるように学校運営を工夫し、児童生徒に、きめ細かい指導を実施しています。子どもたちは、豊かな体験を通して、様々な気付きを得ながら、共に学び合うことができています。

（２）児童生徒数の推移について

白須賀小学校では、平成 25 年度には、１学年平均人数が 35 人を超えていました。平成 30 年度には、35 人以下に、令和５年度には 30 人を大きく下回るようになっています。少しずつですが、児童数の減少は続いており、令和 10 年には 20 人を下回る可能性も生じています。令和 10 年度以降も減少が続いていくと、１学年 15 人を下回る可能性もあります。

白須賀中学校では、令和５年度には、１学年平均人数が 30 人となっています。しかし、令和 13 年度以降は、１学年 20 人を下回るようになります。令和 16 年度には、全校で 50 人になる可能性があります。また、近隣の岡崎中学校も令和 12 年度以降は生徒数が減少していくことが見込まれています。新居中学校では、令和５年度以降は、生徒数が減少していくことが見込まれています。

白須賀小学校の児童数の推移（見込）

白須賀小	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計	1学年平均
H25	36	33	39	35	42	48	233	38.8
H26	35	36	32	37	35	42	217	36.2
H27	33	36	35	29	38	36	207	34.5
H28	39	31	36	34	30	39	209	34.8
H29	24	37	31	35	34	31	192	32.0
H30	34	25	38	31	34	33	195	32.5
R 1	19	34	25	37	31	34	180	30.0
R 2	36	20	35	24	36	30	181	30.2
R 3	23	35	20	34	24	36	172	28.7
R 4	30	23	36	19	35	24	167	27.8
R 5	16	31	23	37	17	35	159	26.5
R 6	26(1)	16(1)	31(1)	23(1)	37(2)	17(1)	150	25.0
R 7	15(1)	26(1)	16(1)	31(1)	23(1)	37(2)	148	24.7
R 8	21(1)	15(1)	26(1)	16(1)	31(1)	23(1)	132	22.0
R 9	17(1)	21(1)	15(1)	26(1)	16(1)	31(1)	126	21.0
R 1 0	12(1)	17(1)	21(1)	15(1)	26(1)	16(1)	107	17.8
R 1 1	13(1)	12(1)	17(1)	21(1)	15(1)	26(1)	104	17.3

白須賀中学校の生徒数の推移（見込）

白須賀中	1年	2年	3年	合計	1学年平均
R 4	35	29	31	95	31.7
R 5	23	36	31	90	30.0
R 6	35(1)	23(1)	36(2)	94	31.3
R 7	17(1)	35(1)	23(1)	75	25.0
R 8	37(2)	17(1)	35(1)	89	29.7
R 9	23(1)	37(2)	17(1)	77	25.7
R 1 0	31(1)	23(1)	37(2)	91	30.3
R 1 1	16(1)	31(1)	23(1)	70	23.3
R 1 2	26(1)	16(1)	31(1)	73	24.3
R 1 3	15(1)	26(1)	16(1)	57	19.0
R 1 4	21(1)	15(1)	26(1)	62	20.7
R 1 5	17(1)	21(1)	15(1)	53	17.7
R 1 6	12(1)	17(1)	21(1)	50	16.7
R 1 7	13(1)	12(1)	17(1)	42	14.0

岡崎中学校の生徒数の推移（見込）

岡崎中	1年	2年	3年	合計	1学年平均
R 4	123	127	112	362	120.7
R 5	127	123	129	379	126.3
R 6	118(4)	127(4)	123(4)	368	122.7
R 7	140(4)	118(4)	127(4)	385	128.3
R 8	119(4)	140(4)	118(4)	377	125.7
R 9	127(4)	119(4)	140(4)	386	128.7
R 1 0	137(4)	127(4)	119(4)	382	127.3
R 1 1	120(4)	137(4)	127(4)	384	128.0
R 1 2	115(4)	120(4)	137(4)	372	124.0
R 1 3	111(4)	115(4)	120(4)	346	115.3
R 1 4	112(4)	111(4)	115(4)	338	112.7
R 1 5	109(4)	112(4)	111(4)	332	110.7
R 1 6	103(3)	109(4)	112(4)	324	108.0
R 1 7	113(4)	103(3)	109(4)	325	108.3

新居中学校の生徒数の推移（見込）

新居中	1年	2年	3年	合計	1学年平均
R 4	132	137	132	401	133.7
R 5	147	131	136	414	138.0
R 6	119(4)	147(5)	131(4)	397	132.3
R 7	130(4)	119(4)	147(5)	396	132.0
R 8	133(4)	130(4)	119(4)	382	127.3
R 9	121(4)	133(4)	130(4)	384	128.0
R 1 0	92(3)	121(4)	133(4)	346	115.3
R 1 1	104(3)	92(3)	121(4)	317	105.7
R 1 2	99(3)	104(3)	92(3)	295	98.3
R 1 3	69(2)	99(3)	104(3)	272	90.7
R 1 4	77(3)	69(2)	99(3)	245	81.7
R 1 5	70(2)	77(3)	68(2)	216	72.0
R 1 6	83(3)	70(2)	77(3)	230	76.7
R 1 7	61(2)	83(3)	70(2)	214	71.3

※１学級 35 人で学級編制を実施。１学年 36 人ならば、２学級となる。

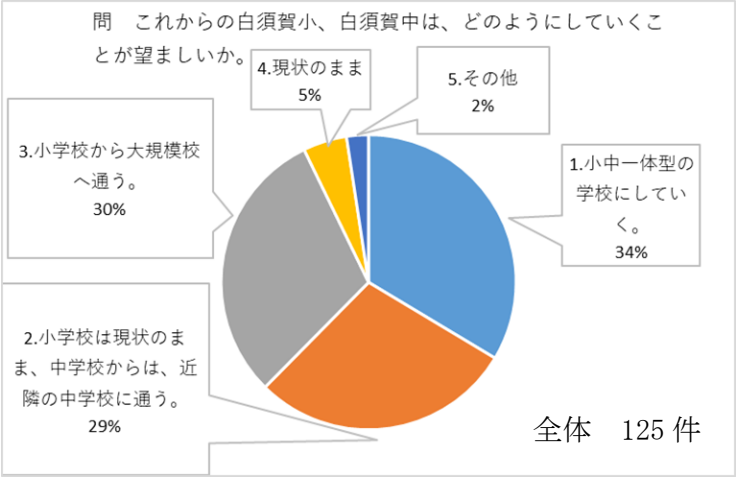
※（　）内の数字は学級数

（３）子育て世代のアンケート結果について

令和５年３月に小学校入学前、小学生のお子さんをお持ちの子育て世代の方を対象としたアンケートを実施しました。今後の方向性として選択項目として以下の４つの案を示しました。

第１案「小中一体型の学校になる案」
第２案「小学校は現状のままとし、中学校からは、近隣の中学校へ通う案」
第３案「小学校から大規模校へ通う案」
第４案「その他」

125 件（対象家庭 210 世帯）の回答があり、「これからの白須賀小、白須賀中は、どのようにしていくことが望ましいのか」について、「小中一体型の学校にしていく」は、34%、「小学校は現状のまま、中学校からは、近隣の中学校に通う」は 29%、「小学校から大規模校へ通う」は 30%となりました。「現状のまま」と回答した割合は、５%であり、子育て世代の方々は、何らかの手法を用いて、学校の在り方を変えていくことを望んでいることが分かりました。特に、「小学校は現状のまま、中学校から、近隣の中学校に通う」、「小学校から大規模校に通う」と回答した割合は、59%であり、６割近い方が、少なくとも中学校からは規模の大きな中学校を希望していることが分かりました。



（４）今後の方向性について

上記の案の中から、これからの方向性については、中学校からは大きな中学校に通うという考えを尊重し、「小学校は現状のままとし、中学校からは、近隣の中学校へ通う案」が、白須賀地区のこれからの子どもたちの教育環境として、最も適していると考えます。

今後の方向性	小学校は現状のままとし、中学校からは、近隣の中学校へ通うことにする。

【メリット】
・小学校は現状のままとすることで、地域の方に御協力をいただきながら、地域のひと・自然・歴史・文化・産業などを生かした体験を重視した教育活動を行うことができる。
・小学校は現状のままとすることで、統廃合することによる通学での負担が生じない。
・中学校からは、さらに多くの人と関わる中で、自他の違いに気付いたり、自分らしさを磨いたりすることで、自己を成長させていくことができる。
・中学校からは、学年ごとにクラス替えがあり、コミュニケーション能力を高める

とともに、人間関係に問題が生じた場合にも、新たな人間関係を築きやすい。

【デメリット】
・小学校の児童数が少ないため、ドッジボールやサッカー、運動会の団体競技など大人数で行う活動は、取り組むことが難しくなる。
・中学校では、人数の少ないところから人数の多いところに通うことになるため、入学時に不安が大きくなる。
・中学生は通学距離が長くなることでの負担が増加する。

小学校の人数は、令和 11 年度には、令和５年度よりも 55 名減少し、１学年 20 人を下回ることが予想されます。そのため、人間関係が固定化しやすかったり、多様な考え方に触れたりする機会が減っていくなどのデメリットはありますが、白須賀地区は近隣の小学校と統合した場合には、通学距離がかなり長くなるため、小学生の負担軽減を重視して、小学校は、現状のままとします。

中学校は、自分の夢や目標に向かって、切磋琢磨しながら学校生活を送り、心身を大きく成長させる時期です。多くの人との関わり合いの中で、多様性を学び、コミュニケーション能力を伸ばしていくことが望ましい時期でもあります。抽象的、論理的思考、社会性なども発達します。その時期に少人数で学校生活を送ることで、多様な考え方から、自己を成長させていく機会が不十分になる可能性があります。

そのような点から、中学校からは、近隣の中学校に通うことで、より多くの人と関わりながら、学校生活を送ることを可能とした方が、小中一体型の学校とするよりも子どもたちの教育環境として望ましいと考えます。どの中学校に通うのかについては、検討が必要です。

（５）白須賀地区の適正配置の難しさについて

白須賀地区の中学校を統廃合した場合、隣接する校区が、鷲津、岡崎、新居となっており、どのように通学区域を変更するのかが大きな課題となります。判断する基準として、行政区と距離の２つが考えられます。

文部科学省「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて～」（平成 27 年１月 27 日）には、通学条件は、『現在の規定では、通学距離については小学校でおおむね４キロメートル以内、中学校でおおむね６キロメートル以内であることが適正とされている。(「義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令」)』と示されています。また、通学距離等の児童生徒への影響として、「小学校５年生の通学と心身の負担に関する調査によると、徒歩の場合、４キロメートルまでは特に顕著な問題はみられないが、４キロメートルを過ぎると少しストレスがかかってくる可能性がある。（ただし、気象等に関する特異な考慮要素が比較的少ない場合におけるデータであることに注意が必要）」とし、さらに「中学校２年生の通学と心身の負担に関する調査によると、徒歩の場合、距離が長くなるにつれ、ストレスが増大してくる可能性がある。自転車の場合、６キロメートルを超えるとストレスを感じている生徒が増える」と示されています。通学距離が、６ｋｍを超えると、自転車通学でもストレスを感じる生徒が増えることは、考慮すべきことであると考えます。

通学区域を変更する場合に、行政区を重視するのか、距離を重視するのか、それぞれのメリット・デメリットを整理しました。

A　行政区を重視する場合

本市は、行政区と通学区域が、ほぼ一致しているという特徴があります。地域で生まれた子どもは、地域の小中学校に通って、親交を深め、そして、大人になっても、その地域で生活をする場合には、小中学校での良好な人間関係は、そのまま継続していくことが利点となっています。このよさをそのまま生かそうとすると、白須賀地区がまとまって、統合することが望ましいと考えます。その場合のメリット・デメリットは以下のように整理できます。

【メリット】

・小中学校で築いた良好な人間関係が、大人になっても、その地域で継続していくことになり、地域の活性化につながる。

・行政区と通学区域が一致していることで、防災訓練の中学生の参加などの地域の行事を実施しやすい。

【デメリット】

・白須賀地区が広いため、どこの学校と統廃合しても、かなり遠距離になり、歩いて通うことができない子どもが生じるため、スクールバスなどの交通手段の確保が必要である。中学生が自転車で通学したとしても、６ｋｍを超える地区もあり、通学が大きな負担となると考えられる。

区　間	距　離
笠子北～新居中	７．４ｋｍ
東笠子～新居中	６．９ｋｍ
境宿西～新居中	７．８ｋｍ
西長谷～新居中	８．２ｋｍ
西長谷～岡崎中	５．８ｋｍ
新町～岡崎中	８．０ｋｍ
笠子北～鷲津中	４．５ｋｍ
坂下～鷲津中	６．６ｋｍ
西長谷～鷲津中	７．７ｋｍ

B　距離を重視する場合

広い地区であるため、子どもたちが通うことの負担を軽減するために、居住地から近い学校に通うことができるように通学区域を変更します。それぞれの地区を近い学校に通うことができるように変更する案として下記のようにします。

・白須賀第１、２・・新居中

・白須賀第３～６・・岡崎中

【メリット】

・近い学校に通うことで、通学の負担が減る。

・中学生が自転車通学をする場合に、通学距離が６ｋｍ以内であり、過度の負担とならない。

【デメリット】

・距離を重視しても、遠距離になる場合が多く、歩いて通うことができない子ど

もが生じるため、スクールバスなどの交通手段の確保が必要である。

・白須賀地区で複数の学校に通っているので、中学生を対象とした地域の行事を実施する際、学校を通して連絡する場合には、時間を要する。

区　　間	距　　離
坂下　～　新居中	５．１ｋｍ
西長谷　～　岡崎中	５．８ｋｍ
東町中　～　岡崎中	５．４ｋｍ

（６）今後のスケジュールについて

まずは、子育て世代の方々に、今後の少子化の進行による課題を知っていただき、その解決に向けて関心を高めていただくことが大切であると考えます。そのために幼稚園・保育園・こども園、小学校の白須賀地区在住の保護者の方が来園、来校する機会を利用して、湖西市として周知に努めていきたいと考えます。次に白須賀地区に在住の方をメンバーに含めた検討委員会を設置し、具体的な計画を示すことができるように検討を進めながら、地域の合意形成を得ていく必要があります。令和６年度には、具体的な実施スケジュールを含んだ基本計画をまとめていきます。

時期	主なスケジュール
令和５年度	幼稚園・保育園・こども園、小学校を対象とした意見交換会の実施、検討する委員会のメンバーの検討、委員会の設置、基本計画の策定開始
令和６年度	具体的な実施スケジュールを含んだ基本計画の策定及び取りまとめ

７　これからの東小学校、知波田小学校、湖西中学校について

（１）現在の東小学校、知波田小学校、湖西中学校の教育活動について

現在の東小学校、知波田小学校ともに児童の実態に応じた教育活動を展開しており、子どもたちを健やかに成長させることができています。お互いのよさを認め合う活動を入れたり、伝え合うことを大切にした授業づくりに力を入れたりすることで、安心して発言し、子どもたちの学びが深まるように工夫しています。また、縦割り班活動を多く取り入れ、学年内の人間関係だけに固定化されないようにしています。

湖西中学校においても、主体的・対話的で深い学びをめざした授業づくりや人間関係調整能力の向上に力を入れて、思いやりと気力のある生徒の育成に取り組んでいます。

小規模校であるため、他学年との調整がつきやすく、運動場や理科室、音楽室などの特別教室を、授業の目的に合わせて選択しやすかったり、昼休みなどに運動場を自由に使うことができたりするなどのメリットもあります。

（２）児童生徒数の推移について

東小学校、知波田小学校の児童数の推移を整理すると、平成 25 年度には、１学年 35 人前後だった規模が、平成 30 年度には、30 人前後、令和４年度に 25 人前後になっています。今後も、減少が続いていくことが予想されています。令和８年度には知波田小学校の入学生が 10 名を下回ることが予想されています。令和 11 年度には、１学年 15 人前後に、近い将来には 10 人前後になっていく可能性もあります。

湖西中では、令和 13 年度までは、１学年２学級ですが、令和 14 年度からは、１学年１学級の学年も生じます。令和 16 年度には、全ての学年で１学級になる可能性があります。また、近隣の岡崎中学校も令和 12 年度以降は生徒数が減少していくことが見込まれています。

東小学校の児童数の推移（見込）

東小	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計	1学年平均
H25	38	40	28	42	33	39	220	36.7
H26	32	39	40	27	41	33	212	35.3
H27	33	33	39	42	27	41	215	35.8
H28	28	33	32	39	42	27	201	33.5
H29	27	27	35	32	38	43	202	33.7
H30	28	26	28	34	29	39	184	30.7
R 1	28	28	27	28	34	29	174	29.0
R 2	22	29	27	27	28	34	167	27.8
R 3	30	19	29	25	29	27	159	26.5
R 4	18	29	20	29	25	29	150	25.0
R 5	21	18	30	20	30	25	144	24.0
R 6	22(1)	21(1)	18(1)	30(1)	20(1)	30(1)	141	23.5
R 7	16(1)	22(1)	21(1)	18(1)	30(1)	20(1)	127	21.2
R 8	14(1)	16(1)	22(1)	21(1)	18(1)	30(1)	121	20.2
R 9	16(1)	14(1)	16(1)	22(1)	21(1)	18(1)	107	17.8
R１０	16(1)	16(1)	14(1)	16(1)	22(1)	21(1)	105	17.5
R１１	14(1)	16(1)	16(1)	14(1)	16(1)	22(1)	98	16.3

知波田小学校の児童数の推移（見込）

知波田小	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計	1学年平均
H25	19	31	38	35	33	36	192	32.0
H26	35	20	33	41	35	32	196	32.7
H27	18	35	19	33	40	35	180	30.0
H28	33	18	35	19	34	40	179	29.8
H29	29	33	17	35	19	34	167	27.8
H30	21	28	32	16	35	19	151	25.2
R 1	17	20	28	33	16	36	150	25.0
R 2	26	17	20	28	32	16	139	23.2
R 3	19	26	17	19	28	32	141	23.5
R 4	30	19	26	18	19	29	141	23.5
R 5	16	29	19	26	18	20	128	21.3
R 6	25(1)	16(1)	29(1)	19(1)	26(1)	18(1)	133	22.2
R 7	23(1)	25(1)	16(1)	29(1)	19(1)	26(1)	138	23.0
R 8	7(1)	23(1)	25(1)	16(1)	29(1)	19(1)	119	19.8
R 9	15(1)	7(1)	23(1)	25(1)	16(1)	29(1)	115	19.2
R１０	14(1)	15(1)	7(1)	23(1)	25(1)	16(1)	100	16.7
R１１	10(1)	14(1)	15(1)	7(1)	23(1)	25(1)	94	15.7

湖西中学校の推移（見込）

湖西中	1年	2年	3年	合計	1学年平均
R 4	53	49	62	164	54.7
R 5	57	54	48	159	53.0
R 6	45(2)	57(2)	54(2)	156	52.0
R 7	48(2)	45(2)	57(2)	150	50.0
R 8	46(2)	48(2)	45(2)	139	46.3
R 9	49(2)	46(2)	48(2)	143	47.7
R 1 0	47(2)	49(2)	46(2)	142	47.3
R 1 1	37(2)	47(2)	49(2)	133	44.3
R 1 2	47(2)	37(2)	47(2)	131	43.7
R 1 3	39(2)	47(2)	37(2)	123	41.0
R 1 4	21(1)	39(2)	47(2)	107	35.7
R 1 5	31(1)	21(1)	39(2)	91	30.3
R 1 6	30(1)	31(1)	21(1)	82	27.3
R 1 7	24(1)	30(1)	31(1)	85	28.3

岡崎中学校の推移（見込）

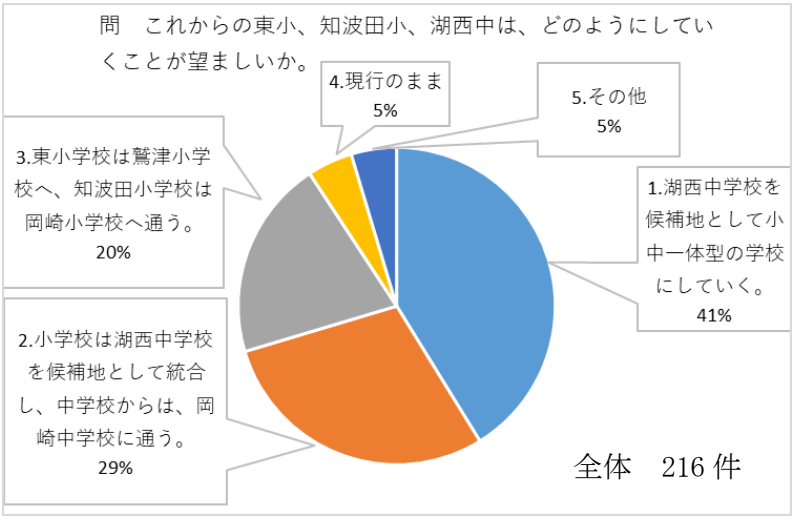
岡崎中	1年	2年	3年	合計	1学年平均
R 4	123	127	112	362	120.7
R 5	127	123	129	379	126.3
R 6	118(4)	127(4)	123(4)	368	122.7
R 7	140(4)	118(4)	127(4)	385	128.3
R 8	119(4)	140(4)	118(4)	377	125.7
R 9	127(4)	119(4)	140(4)	386	128.7
R 1 0	137(4)	127(4)	119(4)	382	127.3
R 1 1	120(4)	137(4)	127(4)	384	128.0
R 1 2	115(4)	120(4)	137(4)	372	124.0
R 1 3	111(4)	115(4)	120(4)	346	115.3
R 1 4	112(4)	111(4)	115(4)	338	112.7
R 1 5	109(4)	112(4)	111(4)	332	110.7
R 1 6	103(3)	109(4)	112(4)	324	108.0
R 1 7	113(4)	103(3)	109(4)	325	108.3

※１学級 35 人で学級編制を実施。１学年 36 人ならば、２学級となる。
※（　）内の数字は学級数

（３）子育て世代のアンケート結果について

令和５年３月に小学校入学前、小学生のお子さんをお持ちの子育て世代の方を対象としたアンケートを実施しました。今後の方向性として選択項目として以下の４つの案を示しました。

第１案「湖西中学校を候補地として小中一体型の学校になる案」
第２案「小学校は湖西中学校を候補地として統合し、中学校からは、岡崎中学校へ通う案」
第３案「東小学校は鷲津小学校へ、知波田小学校は岡崎小学校へ通う案」
第４案「その他」



216 件（対象家庭 373 世帯）の回答があり、「これからの東小、知波田小、湖西中は、どのようにしていくことが望ましいのか」について、「湖西中学校を候補地として小中一体型の学校にしていく」が 41%、「小学校は湖西中学校を候補地として統合し、中学校からは、岡崎中学校に通う」

が 29%、「東小学校は鷲津小学校へ、知波田小学校は岡崎小学校へ通う」が 20%となりました。「現状のまま」と回答した割合は、５%であり、子育て世代の方々は、何らかの手法を用いて、学校の在り方を変えていくことを望んでいることが分かりました。特に「湖西中学校を候補地として小中一体型にしていく」、「小学校は湖西中学校を候補地として統合し、中学校からは岡崎中学校に通う」と回答した割合は 70%であり、７割の方が東小学校と知波田小学校を統合することを希望していることが分かりました。

少なくとも、小学校は、知波田小学校と東小学校が、それぞれ存続する形ではなく、小中一体型となったり、小学校同士で統合したりするなど、小学校の段階から人数を増やし、出会いを多くする環境を整えていくことを希望していると判断できます。

（４）今後の方向性について

上記の案を示して、アンケートを実施しました。アンケート結果からも、「小学校は湖西中学校を候補地として統合する」ことが、北部地区のこれからの子どもたちの教育環境として最も適していると考えます。中学校について、「小中一体型にする」のか、「岡崎中学校に通う」のかは、さらに検討が必要であると考えます。

今後の方向性　小学校は湖西中学校を候補地として統合する。
中学校については、小中一体型にするのか、岡崎中学校に通うのかについては、さらに検討する。

現在の教育活動は、地域の方の協力を得ながら、体験活動を充実させ、子どもたちを育むことができており、今後も、地域のひと・自然・歴史・文化・産業などを生かした体験活動の充実は、子どもたちの教育に大切なものであると考えます。東小学校と知波田小学校では、それぞれ充実した体験活動が行われています。湖西中学校を候補地として東小学校と知波田小学校が一つの学校になり、校区が広くなっても、現在の活動を生かしながら、子どもたちが豊かな体験を重ねていくことは可能であると考えます。

今後、少子化が進み、児童生徒数が減少していくため、東小学校、知波田小学校は、児童数が次のようになっていくと予想されています。

令和５年度　児童生徒数

R5	東小	知波田小	湖西中
1年	21	16	57
2年	18	29	54
3年	30	19	48
4年	20	26	
5年	30	18	
6年	25	20	
全体	144	128	159

令和 11 年度　児童生徒数（推計）

R11	東小	知波田小	湖西中
1年	14	10	37
2年	16	14	47
3年	16	15	49
4年	14	7	
5年	16	23	
6年	22	25	
全体	98	94	133

令和 16 年度　生徒数（推計）

R16	湖西中
1年	30
2年	31
3年	21
全体	82

令和 11 年度には、東小学校、知波田小学校で、１学年 15 人前後となる学年が半数

以上を占めています。

東小学校と知波田小学校が１つになった方が、児童数が増えることで、人との出会いが増え、コミュニケーション能力を育んだり、活気のある学校行事を実施したりすることが可能になります。例えば、運動会や学習発表会、休み時間などで、大人数での演技や発表、遊びをすることが可能となります。切磋琢磨し、活気のある環境で学校生活を送るとともに、少人数のよさである一人一人に出番があり、集団の中での自分の役割を自覚して、物事に取り組み、自己を成長させていく教育環境が整うことになります。

中学校については、「小中一体型」とするのか、「岡崎中学校に通う」のかは、メリット・デメリットがあり、それぞれについて具体案を作成し、比較検討することで、方針を定める必要があります。それぞれの案について、現時点でのメリット・デメリットを整理しました。

○小中一体型の学校になる案

小中一体型の学校になることで、小学生と中学生が関わる機会が増え、小学生にとっては、中学生の合唱、発表などを鑑賞することで、あんな風になりたいという目標をもって前向きに取り組む意欲の醸成が期待されます。中学生にとっても、自分の成長を自覚でき、他者に対する思いやりの気持ちを育む機会となります。

このような小中一体型の特徴を生かした学校経営を行いながら、東小学校区、知波田小学校区に立地するよさを生かし、地域のひと・自然・歴史・文化・産業などを生かした豊かな体験活動を実施していくと共に、キャリア教育、多文化共生教育、環境教育など今日的な教育課題に特化した特色のある教育を１年生から９年生まで一貫して学びを重ねていくことで、社会の中にある様々な問題に対して、自分ごととして捉え、積極的に解決していこうとする資質・能力をもった子どもを育成することにつながっていきます。

また、小規模特認校の仕組みを研究し、小中一体型の学校を小規模特認校に指定することで、希望した場合には、校区外からも通うことができる仕組みを導入することで、児童生徒数が増え、より多くの人と関わりながら学校生活を送ることができる可能性があります。

一体型の学校となった場合のメリットとデメリットを整理すると下記のようになります。

【メリット】

・人との出会いが増えることで、授業の中で多様な意見を聞いて自分の考えを整理したり、級友の取り組む様子から刺激を受けて、意欲的に取り組んだりする機会が増える。

・小学校と中学校で別々に、または小学校と中学校で一緒にと、学校行事を柔軟に企画することで、子どもたちが意欲的に活動する場が増え、学校の活性化を図ることができる。

・特色のある小中一貫教育を行うことで、異学年でかかわりながら個性を伸ばしたり、知識・技能を高めたりすることができる。

【デメリット】

・少人数で９年間同じメンバーでの学校生活となるので、人間関係のもつれが生じた場合には、修復が難しい。

・少子化が継続していくことが予想されるため、早い段階で１学年１学級になっていく。

※湖西中学校を候補地としていますが、現在の施設を生かしながらどのように整備すれば、小学生が過ごしやすい環境になるのか、小学生のための遊具や小学生用の小プールの設置などをどのように行うのかなど、湖西中学校の敷地に小学校と中学校をそれぞれ設置し、子どもたちにとって学びやすい教育環境をどのように整えていくのかについては、今後の検討が必要です。

通学距離について

距離の測定の際には、主要道路を通る経路としましたが、通学路の決定には、交通量や道幅、歩道の確保など、安全面を十分に考慮していく必要があります。

湖西中学校を候補地とした小中一体校までの距離

区間	距離	区間	距離
大知波～湖西中	２．６ｋｍ	入出～湖西中	２．６ｋｍ
利木～湖西中	２．９ｋｍ	新所～湖西中	３．０ｋｍ
横山～湖西中	４．２ｋｍ	日の岡～湖西中	２．１ｋｍ

湖西中学校を候補地とした場合、知波田小学校区と東小学校区の中間に立地しているため、３ｋｍ以内の通学距離になる地区が多くあります。通学距離が長くなり歩いて通うことができない場合には、スクールバスなどの通学手段を確保する必要があると考えます。

○中学校からは岡崎中学校に通う案

中学校段階は、自分の夢や目標に向かって、切磋琢磨しながら学校生活を送り、心身を大きく成長させることができる時期です。多くの人との関わり合いの中で、多様性を学び、コミュニケーション能力を伸ばしていくことが望ましい時期でもあります。湖西中学校の生徒数は、令和 16 年度からは、全ての学年で１学級になることが予想されています。そのような点から、中学校からは、岡崎中学校に通うことで、多様な考え方に触れながら学校生活を送ったり、コミュニケーション能力を育んだりすることができます。

【メリット】

・中学校からは、さらに多くの人との関わりの中で、自他の違いに気付いたり、体育大会や合唱コンクールなどの行事で、学級で団結して競い合ったりすることができる。

・中学校では、学年ごとにクラス替えがあり、コミュニケーション能力を高めるとともに、人間関係に問題が生じた場合でも、新たな人間関係を築きやすい。

【デメリット】

・中学生は通学距離が長くなることでの負担が増加する。

通学距離について

距離の測定の際には、主要道路を通る経路としましたが、通学路の決定には、交

通量や道幅、歩道の確保など、安全面を十分に考慮していく必要があります。

中学校からは、岡崎中学校へ通う距離

区間	距離	区間	距離
横山～岡崎中	７．０ｋｍ	利木～岡崎中	５．６ｋｍ
大知波～岡崎中	５．３ｋｍ	太田～岡崎中	３．２ｋｍ
新所～岡崎中	４．１ｋｍ	入出～岡崎中	５．０ｋｍ
日の岡～岡崎中	２．７ｋｍ	女河浦～岡崎中	４．８ｋｍ

岡崎中学校への通学距離は、３ｋｍを超える地域が多くなるため、徒歩で通うことが難しく、スクールバスなどの交通手段を確保することや自転車通学を認めていくことが必要となると考えます。

（５）今後のスケジュールについて

小中一体型の施設とした場合には、湖西中学校を候補地として、「現在の施設を最大限生かしながら、敷地内に小学校と中学校の２校を配置し、どのように小学校を整備していくのか。」、「小学生の遊具はどこに設置するのか。」、「体育館やプール、特別教室はどのように利用していくのか。」、「どのような小中一貫教育を実施していくのか。」、「スクールバスの運行方法をどのようにするのか。」など検討を必要とする課題があります。

湖西中学校を候補地として小学校を統合し、中学校からは岡崎中学校に通うことにした場合には、「現在の施設を最大限に生かしながら、どのように小学校を整備していくのか。」、「特色のある学校づくりをどのように進めるのか。」、「湖西中学校の生徒が通うことができるように、岡崎中学校の施設は増設する必要があるのか。」、「スクールバスの運行や自転車通学など安全に登下校できるように、どのように整備していくのか。」など検討を必要とする課題があります。

それらについて、北部地区に在住の方をメンバーに含めた検討する委員会を立ち上げ、具体案を示しながら議論し、基本計画をまとめていく必要があります。また、具体的な実施スケジュールについても、基本計画の中で検討していく予定です。令和５年度に検討会を立ち上げ、令和６年度には具体的な実施スケジュールを含んだ基本計画をまとめていきます。

時期	主なスケジュール
令和５年度	湖西中学校を候補地として小学校を開設し、これからの中学校について検討する委員会の設置、基本計画の策定開始
令和６年度	具体的な実施スケジュールを含んだ基本計画の策定及び取りまとめ

８　おわりに

現在、本市においては、子育て・教育の充実などの４つの柱に加えて、中・長期的な観点からの、モノづくり人材育成、土地利活用の推進、広域連携などを進めることで、「職住近接」による、持続可能なまちづくりに取り組んでいるところです。昨今の急激な少子化の進行を考慮し、子どもたちにとってよりよい教育環境を充実させることを基本的な考え方として、学校再編方針をまとめました。

子どもたちが、目標を自分ごととして受け止め、仲間と共に切磋琢磨して取り組む環境を整えていくことで、子どもたちが意欲的に学び続け、社会に出てからも、積極的に物事に関わろうとする力を育てていくことができます。このような環境を整えていくことで、若い世代の方々が、安心して子育てできることにもなっていきます。今後は、白須賀地区、北部地区でより具体的な計画を立て、今後のスケジュールを示していく予定です。

また、学校再編を進める上で、学校の跡地利用については、地域が活性化するような活用方法を検討していく必要があります。

この先、20 年後、30 年後に、本市がどのように発展していくのか。社会情勢も大きく関わっていくものと推察されます。今後も、子どもたちにとってよりよい教育環境を充実させることを基本的な考え方として、児童生徒数の推移を注視していく必要があります。将来的な人口推移を踏まえたさらなる統廃合も視野に入れるなど、市の実情に合わせて、子どもたちにとってよりよい教育環境を柔軟に考えていくことが大切であると考えます。